

# 初期成人期の母娘関係に関する研究（Ⅱ）<sup>※1</sup>

— 母娘システムの共分散構造分析 —

新美明夫<sup>※2</sup>・永田忠夫<sup>※3</sup>・松尾貴司<sup>※2</sup>

## I. 問題

前報（永田・新美・松尾，2005）では，初期成人期の母娘関係を，母システムと娘システムという二つの下位システムをもつ，母と娘の二者間システム（世代間システム）としてとらえ，娘が青年期後期に至るまでに培われてきた二者間関係を，その後どのような形で維持し発展させてきているのかを検討した。

母娘システムは，システム構造，システム機能の面からとらえられる。前報（永田ら，2005）では，システム構造については，その要素として母システム（生活基盤），娘システム（職業・結婚・子ども・生活基盤），二者間関係構造（居住形態・空間的距離）を，システム機能については母と娘の絆，相互支援を取り上げ，おもに母娘システムの年齢（娘の年齢）との関連を検討した。また，母娘システムの安定状態の維持に重要なコミュニケーションについても同様に検討を行った。このように，母娘システムの個々の要素について，システム年齢の経過による変化を横断的な方法ではあるが検討してきた。

前報（永田ら，2005）の今ひとつの目的は，母娘システムの各要素間の関連を検討することであった。そこで，初期成人期から次の発達段階以降ますます重要な機能となる相互支援について，他のシステム要素のすべてを説明変数として，重回帰分析を行うことによって分析を行った。その結果，いくつかの重要な知見を得たが，説明変数として投入した変数の数が多く，結果が非常に煩瑣であること，システムの要因間に相関関係が想定されるにもかかわらず，線形関係を前提とした重回帰分析を採用したことなど，十分に検討を尽くせなかった感がある。そこで本稿では母娘関係の中核であるシステム機能に注目して，母娘システム全体の中での位置づけを再検討することとした。

前報（永田ら，2005）において，とくに相互支援に注目して分析を行ったのは，現在わが国が迎えている高齢化・少子化社会において，それが重要な機能となるからであり，母と娘間の情緒的結びつき（母と娘の絆）を基盤とした相互サポート機能が十分発揮される状況を検討する必要性が増してくるからである。母娘システムのシステム機能としては，今回，相互支援と母と娘の絆を取り上げているが，このように母と娘の絆から相互支援に向かう因果パスが想定できる。そしてこれらのシステム機能の要素に対して，母娘システムの他の要素が複雑に影響すると考えられる。

母娘システムのシステム機能に影響を与えるのは，大きく見ると2者間のシステム構造および，

---

※1 本研究は，平成14年度・15年度愛知淑徳大学研究助成（共同研究）を受けた。

※2 コミュニケーション心理学科

※3 医療福祉学部福祉貢献学科

システム維持の基盤であるコミュニケーションである。このうち、2者間のシステム構造については、システム年齢が決定的な影響をもち、システム年齢の進行が母システム・娘システムおよびその両システム間の構造（同居の別・空間的距離）を変容させる。本稿では、システム年齢に伴って変容する2者間システム構造の典型的な特質を、娘の属性の変化に求め（職業の有無・結婚の有無・子どもの有無）、これらをまとめて発達属性と呼ぶことにした。この発達属性は2者間構造（空間的距離）に影響を与えるとともに、両者はシステム機能とコミュニケーションに影響を与えるものと思われる。コミュニケーションは発達属性、2者間構造から影響をうけるとともに、システム機能に影響を与えると思われる。以上のようなシステム要素間の関連をパス図で示すと、図1のようになる。

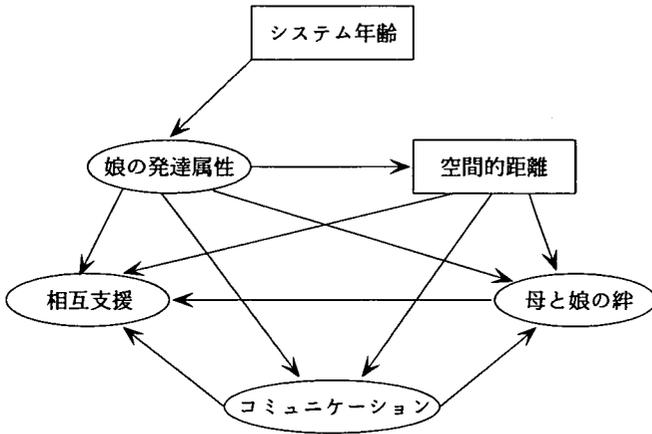


図1 共分散構造分析のためのパス図（当初）

母娘システムの要素であるシステム構造（娘の発達属性、空間的距離）、システム機能（母と娘の絆、相互支援）、コミュニケーションは、システム論的概念から整理された構成概念である。前報（永田ら、2005）では、この中の相互支援に注目して、これに対する各要素の影響を検討したのであったが、各構成概念の指標となる観測変数そのもので分析を行ったため、結果が煩瑣なものとなり、システム要素間の関連の検討としては今

ひとつ明瞭さを欠いたものであった。本稿では、分析の中に構成概念そのものを潜在変数として導入できる共分散構造分析（山本、1999）を行うことによって、分析に導入する変数を整理し、母娘システム全体の様相を明らかにすることを目的としている。

## II. 方法

### 1. 分析対象

前報（永田ら、2005）と同一のデータを分析対象とした。詳細は前報で報告したが、要点を述べると、愛知淑徳短期大学コミュニケーション学科の全卒業生（すべて女性）2,054名のうち、住所の判明している1,917名を対象に2003年9月から、2004年2月にかけて行われた郵送調査で得られたデータを対象とした。調査時点での対象者の年齢は、23歳から35歳<sup>\*4</sup>である。最終的な有効回収数は887票、回収率は46.3%であったが、実際に分析対象としたのは、調査対象者を育ててくれた母親が存命の867人である。

※4 対象者の年齢は設問しておらず、短大に現役入学した者を基準に推定している。

## 2. パス解析に用いた質問項目

調査票全体の構成については前報（永田ら，2005）で報告したので，ここでは分析に用いた質問項目のみを取り上げる。

### 1) 娘の発達属性

初期成人期に娘システムで起こる構造的な変化を表す指標として「配偶者の有無」「子どもの有無」「職業の有無」を取り上げた。いずれの項目についても，年齢の進行とともに該当者が多くなる属性カテゴリー（配偶者あり，子どもあり，職業なし）を「2」，対照となる属性カテゴリー（配偶者なし，子どもなし，職業あり）を「1」とコーディングして分析に使用した。なお，対象者の年齢別の既婚率，有子率，有職率を表1に示した。

表1 娘の発達属性の内訳

年齢	既婚率	有子率	有職率
23	6.3%	4.2%	91.7%
24	11.1	2.2	78.3
25	15.7	7.8	90.2
26	34.8	10.6	78.7
27	36.7	14.3	76.5
28	54.7	29.5	66.7
29	68.7	34.1	59.0
30	76.5	45.9	54.1
31	86.4	68.7	39.8
32	75.0	60.9	53.6
33	83.3	74.1	37.0
34	85.3	68.7	45.6
35	84.8	68.2	43.9

### 2) 母娘間の空間的距離

対象者（娘）が母親の住んでいる家まで行くのにかかる時間を，分単位で測定した。なお，対象者が母親と同居している場合には，空間的距離を0とした。前報（永田ら，2005）で報告されている平均値を再掲すると，対象者全体では，50.53分（SD = 92.75），同居者を除いた別居者の平均値は，80.06分（SD = 106.16）であった。空間的距離を，ご近所（15分以内），ちょっと離れているがいつでも会いに行ける範囲（～30分以内），何か用事があって出かけて会いに行く範囲（～1時間以内），都合をつけて出かけ会いに行く範囲（～3時間以内），会いに行けば1日以上つぶれそうな範囲（3時間を越える）に分類した結果を表2に示した。

表2 母娘間の空間的距離（同居者を除く）

母の家まで	度数	%	累積%
15分以内	146	26.7	26.7
～30分以内	109	20.0	46.7
～1時間以内	127	23.3	70.0
～3時間以内	94	17.2	87.2
3時間を越える	70	12.8	100.0
計	546	100.0	

### 3) 母と娘の絆

小高（1998），落合ら（1996），水野（2002）を参考にして，26項目を作成し，「まったくあてはまらない（1点）」から「非常によくあてはまる（5点）」の5段階評定尺度で設問した。具体的な項目内容については表3を参照されたい。

### 4) 相互支援

物的資源（2種類），生活情報資源（1種類），労働力（2種類），金銭（1種類），心理的援助（2種類）のそれぞれについて，母から娘への提供と娘から母への提供の両方向の頻度について設問した。頻度は，「ほぼ毎日（1点）」「2，3日に1回程度（2点）」「週に1回程度（3点）」「月に1回程度（4点）」「3か月に1回程度（5点）」「半年に1回程度（6点）」「1年に1回程度（7点）」「まったくなかった（8点）」の8段階評定尺度とした。具体的な項目内容については表6を参照されたい。

## 5) コミュニケーション

対面会話、共行動、電話、メール、郵便による交流の頻度を相互支援と同様の8段階評定尺度でたずねた。共行動、電話、メール、郵便による交流については、発信者が母の場合と娘の場合の両方を設問した。具体的な項目内容については表9を参照されたい。

## III. 結 果

## 1. 「母と娘の絆」の尺度構成

母と娘の絆について設問した26項目については、前報（永田ら、2005）において因子分析が行われ、5つの下位尺度が構成されている（以後、原尺度と呼ぶ）。しかし、しかしその尺度構成過程において、先行研究である水野（2002）、小高（1998）の結果との対応関係を重視したため、下位尺度の構成項目数が1～8項目と、かなりアンバランスな構成となっている。さらに、水野（2002）は30～69歳の女性（娘）、小高（1998）は大学生1～4回生男女（子ども）を対象としており、今回の対象者である初期成人期の娘とは発達段階を異にしている。以上の点から、より適切な尺度を構成するため、因子分析を改めて行うこととした。

因子の抽出には重み付けのない最小二乗法を用いた。因子数の決定には固有値1以上の基準を設けたところ、前報（永田ら、2005）と同様に5因子が抽出された。プロマックス回転を行った結果の因子パターンを検討したところ、第5因子に0.4以上の因子負荷を示す項目が1項目しかなく、独立した因子とは言いがたいことがわかった。そこで、因子数を4に減じて、再度同様の因子分析を行った。因子パターンの検討の結果、どの因子にも0.4以上の因子負荷を示さなかった項目が見られた。これら3項目（項目番号15, 17, 18）を除いて最終的な因子分析を行った。その因子パターンを表3に示した。

第1因子は、原尺度の「感謝の念」を構成する8項目中7項目で構成されている。今回含まれなかった1項目（項目番号10）は母との相互信頼を表す内容であり、第4因子への負荷が高くなっている。原尺度よりも明確に「感謝の念」を表す下位尺度となったといえよう。このまま「I. 感謝の念」と名付ける。

第2因子は、原尺度の「人生のモデル」を構成する8項目中6項目で構成されている。今回の分析では、価値観の一致を示す項目番号25と、母親によるはげましの効果を表す項目番号18が脱落している。これも原尺度同様「II. 人生のモデル」と名付けてよからう。

第3因子は、原尺度の「母への依存」を構成する項目に、母との価値観の一致を表す項目番号25と母の意見の重要性を表す項目番号4を加えた5項目構成になっている。原尺度では少々構成項目数が少なかったが、より適切な下位尺度として構成されたと言えよう。原尺度と同様に「III. 母への依存」と名付ける。

第4因子は、原尺度の「対等な関係」を構成する項目に、母との相互信頼を表す項目番号10が加わり、5項目構成となった。これについても、より下位尺度名称の内容を明確に表すものになったと言えよう。原尺度と同様に「IV. 対等な関係」と名付ける。

以上のように構成された各下位尺度について、構成項目の合計得点を算出することで下位尺度得点とした。表4に各下位尺度の記述統計量と、下位尺度の内的整合性を確認するために算出したク

表3 「母と娘の絆」の因子パターン（最小二乗法、プロマックス回転）

尺度項目	因子	I	II	III	IV
		感謝の念	人生のモデル	母への依存	対等な関係
2 お母さんを大事に思っている		.962	-.100	.014	-.066
1 お母さんに対して感謝の気持を持っている		.927	-.081	.017	-.087
7 お母さんに対してこれからは、親孝行したい		.724	-.055	.100	.038
13 最近お母さんのありがたみを感じるがよくある		.538	-.146	.268	.091
8 お母さんに大事に思われている、と感じる		.532	.185	-.151	.065
3 私はお母さんを尊敬している		.514	.220	.196	-.119
19 私は、このお母さんの子であってよかったと思う		.428	.142	.287	.018
6 お母さんによって自分の人生観が深められた		.118	.813	-.057	-.070
12 お母さんによって自分の視野が広がった		-.079	.812	.054	.008
24 お母さんの影響で自分の考えがしっかりしたものとなった		-.171	.747	.149	.033
26 お母さんは生き方の1つのモデルを私に示してくれたと思う		-.070	.621	.103	-.077
9 お母さんは私のことを誇りに思っていてくれる		.214	.487	-.320	.221
21 お母さんの考え方や生き方を尊重している		.135	.483	.176	.028
22 重要なことを決めるときには、相談する（相談したいと思う）		.088	-.067	.757	.035
14 お母さんに突き放されるとショックである		.092	-.009	.565	-.120
4 私が何かを決める際、お母さんの意見は十分参考になる		.176	.223	.499	-.062
20 お母さんと一緒にいるだけでなんとなく安心できる		.223	.150	.498	.017
25 私の価値観はお母さんの価値観と一致している		-.199	.375	.477	.100
23 お互いが対等な関係であると思う		-.146	-.098	.120	.707
5 お互いに独立した人間としてつきあっている		-.022	.094	-.201	.640
11 お互いに自分の考えや意見をはっきり言い合える		.034	-.054	.114	.567
10 私とお母さんはお互いに信頼しあっていると思う		.313	.207	-.078	.465
16 おたがいに悩みごとを打ち明けられる		.054	-.022	.358	.412

【尺度構成からはずれた項目】

15 お母さんは私の言うことや行動を受け入れてくれる
17 お母さんは何かと私の言動に口を出してくる
18 お母さんの言動によって何かをする意欲が湧いてきた事がある

表4 「母と娘の絆」下位尺度得点の記述統計量とα係数

	I	II	III	IV
	感謝の念	人生のモデル	母への依存	対等な関係
平均値	31.99	21.92	19.26	19.56
中央値	33	22	20	20
標準偏差	3.54	4.33	3.83	3.37
分散	12.51	18.72	14.71	11.38
最小値	7	6	5	5
最大値	35	30	25	25
α係数	0.883	0.854	0.828	0.768

表5 「母と娘の絆」の二次因子分析（最小二乗法、回転なし）

下位尺度	因子負荷量
I. 感謝の念	.812
II. 人生のモデル	.820
III. 母への依存	.837
IV. 対等な関係	.743

ロンバックのα係数をあわせて示した。「IV. 対等な関係」のα係数がやや低いものの他の下位尺度は0.8以上を示しており、十分な信頼性があることがわかった。

母と娘の絆について、上記のように4下位尺度が構成されたので、パス解析にはこれらの下位尺度得点を観測変数として利用することにした。これらの下位尺度の潜在変数を設定する際の参考にするために、この4下位尺度で因子分析を行った。因子の抽出には重み付けのない最小二乗法を用

いた。因子数の決定には固有値1以上の基準を設けたところ、1因子のみが抽出され、因子負荷量は、表5のようになった。これらの結果から、パス解析では、これら4下位尺度の潜在変数として「母と娘の絆」を設定することにした。

## 2. 「相互支援」の尺度構成

相互支援についても前報（永田ら，2005）で尺度構成がなされているが、念のため「母と娘の絆」と同様の手順で因子分析を改めて行った。

因子の抽出には重み付けのない最小二乗法を用いた。因子数の決定には固有値1以上の基準を設けたところ、前報（永田ら，2005）と同様に4因子が抽出された。プロマックス回転を行った結果の因子パターンを検討したところ、因子の抽出順は異なるものの、前報（永田ら，2005）とまったく同様の構成の因子が見いだされた。その因子パターンを表6に示した。前報（永田ら，2005）にならって、順に「Ⅰ. 日常的サポート」「Ⅱ. 緊急時サポート」「Ⅲ. 心理的サポート」「Ⅳ. 儀礼的物資交換」と命名する。

以上のように構成された各下位尺度について、構成項目の合計を算出することで下位尺度得点とした。表7に各下位尺度の記述統計量と、下位尺度の内的整合性を確認するために算出したクロンバックの $\alpha$ 係数をあわせて示した。「Ⅱ. 緊急時サポート」の $\alpha$ 係数がやや低いものの他の下位尺度は0.8前後の値を示しており、十分な信頼性があることがわかった。

相互支援について、上記のように4下位尺度が構成されたので、パス解析にはこれらの下位尺度得点を観測変数として利用することにした。これらの下位尺度の潜在変数を設定する際の参考にするために、この4下位尺度で因子分析を行った。因子の抽出には重み付けのない最小二乗法を用い

表6 「相互支援」の因子パターン（最小二乗法，プロマックス回転）

尺度項目	因子	I	II	III	IV
		日常的サポート	緊急時サポート	心理的サポート	儀礼的物資交換
母8 生活の知恵・料理・ファッションなど身近なことについてのアドバイスをしてくれた（情報）		.765	-.132	.110	-.007
娘8 生活の知恵・料理・ファッションなど身近なことについてのアドバイスをした（情報）		.723	-.016	.055	.009
娘6 食べ物・日用品・衣服などをあげた（物）		.575	-.023	-.076	.188
母6 食べ物・日用品・衣服などをくれた（物）		.566	-.086	-.041	.167
母9 家事・育児や家族の世話などの用事を手伝ってくれた（労力）		.462	.327	-.014	-.157
娘9 家事・育児や家族の世話などの用事を手伝った（労力）		.428	.382	-.008	-.200
娘10 母が病気やけがをした時、看病や生活援助をした（労力）		-.100	.940	-.100	.058
母10 病気やけがをした時、看病や生活援助をしてくれた（労力）		.052	.687	-.005	.099
娘11 お金が必要な時、金銭的な経済援助をした（金）		-.105	.398	.103	-.008
母11 お金が必要な時、金銭的な経済援助をしてくれた（金）		.005	.365	.136	.071
母13 母に悩みごとや相談ごとを聴いてもらった（心理）		.027	-.128	.880	.011
娘13 悩みごとや相談ごとを聴いてあげた（心理）		.054	-.016	.761	-.030
母12 困った時、つらい時に、一緒にいてくれた（心理）		.004	.173	.709	.015
娘12 困った時、つらい時に、一緒にいてあげた（心理）		-.072	.307	.635	.029
母7 誕生日や盆・正月などの機会に品物を送ってきた（物）		.088	.046	.010	.804
娘7 誕生日や盆・正月などの機会に品物を送った（物）		.044	.053	.006	.777

表7 「相互支援」下位尺度得点の記述統計量とα係数

	I	II	III	IV
	日常的 サポート	緊急時 サポート	心理的 サポート	儀礼的 物質交換
平均値	26.83	27.33	21.16	12.44
中央値	26	29	22	13
標準偏差	8.15	5.21	7.41	2.63
分散	66.39	27.10	54.95	6.90
最小値	6	4	4	2
最大値	48	32	32	16
α係数	0.792	0.710	0.880	0.828

表8 「相互支援」の二次因子分析  
（最小二乗法、回転なし）

下位尺度	因子負荷量
I. 日常的サポート	.714
II. 緊急時サポート	.712
III. 心理的サポート	.800
IV. 儀礼的物質交換	.412

た。因子数の決定には固有値1以上の基準を設けたところ、1因子のみが抽出され、因子負荷量は、表8のようになった。これらの結果から、パス解析では、これら4下位尺度の潜在変数として「相互支援」を設定することにした。

### 3. 「コミュニケーション」の因子構造

母娘間のコミュニケーションを問う項目は9項目用意されたが、そのうち8項目は4種類のコミュニケーションメディアが取り上げられ、発信者が母であるか娘であるかだけが異なるものであった。コミュニケーションが相互的な交流であることから、これらの同一のメディアについて設問している項目間では強い相関が見られることが予想される。そこで、これら9項目の相互相関を算出し、その結果を表9に示した。

表9 コミュニケーションの項目間相関係数

項目内容	母1	娘2	母2	娘3	母3	娘4	母4	娘5
母1 お母さんと私は直接会って（顔をあわせて）話した								
娘2 お母さんに電話をかけて話をした	-.045							
母2 お母さんが電話をかけてきて話をした	-.125 ***	.746 ***						
娘3 手紙やハガキあるいはFAXを出した	-.327 ***	.095 **	.134 ***					
母3 母から手紙やハガキあるいはFAXがきた	-.317 ***	.073 *	.150 ***	.704 ***				
娘4 携帯メールやパソコンメールを送った	.022	.119 **	.123 ***	.022	.106 **			
母4 母から携帯メールやパソコンメールがきた	.036	.117 **	.121 ***	.020	.102 **	.960 ***		
娘5 お母さんと行動を共にすることを誘った	.393 ***	.224 ***	.206 ***	-.121 ***	-.146 ***	.127 ***	.124 ***	
母5 母に行動を共にすることを誘われた	.420 ***	.207 ***	.243 ***	-.128 ***	-.108 **	.130 ***	.131 ***	.784 ***

\*\*\* p<.001, \*\* p<.01 \* p<.05

註) 相関係数の絶対値が0.3以上のものをイタリック、0.7以上のものを太字で示してある

表9からわかるように同一メディア間の項目では、発信者が母の場合の項目と娘の場合の項目との間に0.7を越える非常に強い相関が見られた。それに対してこれら以外の項目間では、共行動の2項目（娘5、母5）と対面会話（母1）の間に0.4前後のそれほど強くない相関がみられるのが目立つ程度で、あまり強い相関は見られなかった。そこで、同一メディアの2項目については合算し

表10 「コミュニケーション」指標の記述統計量

	対面 会話	電話 交流	郵便 交流	メール 交流	共行動
平均値	2.61	7.14	15.25	12.37	9.01
中央値	3	6	16	16	8
標準偏差	1.61	2.93	1.77	4.85	2.93
分散	2.59	8.60	3.12	23.48	8.59
最小値	1	2	6	2	2
最大値	8	16	16	16	16

表11 「コミュニケーション」指標の因子分析  
(最小二乗法, バリマックス回転)

因子 指標	I. 対 面 的 コミュニケーション	II. 友 人 的 コミュニケーション
対面会話	.802	.063
郵便交流	-.454	.144
共行動	.488	.599
メール交流	-.009	.247
電話交流	-.148	.533

て、それぞれ、電話交流、郵便交流、メール交流、共行動を表す指標とした。対面会話（母1）を含めた各項目の記述統計量を表10に示した。

母娘間でのコミュニケーションを表す指標が9項目から5項目になったため、パス解析にはこれらの項目を直接利用することにした。これらの項目の潜在変数を設定する際の参考にするために、この5項目で因子分析を行った。因子の抽出には重み付けのない最小二乗法を用いた。因子数の決定には固有値1以上の基準を設けたところ、2因子が抽出された。バリマックス回転を行った結果、回転後の因子負荷量は、表11のようになった。

因子負荷量の布置を見ると、共行動がいずれの因子にも負荷が高いことがわかる。第1因子はこの他に、対面会話と郵便交流の負荷が高く、郵便交流は負の値を示していることから、対面してのコミュニケーションの多さを表しているものと思われる。第2因子は電話交流の負荷が高く、メール交流はそれほど高くはないものの第2因子の方に負荷が大きい。電話やメールで連絡を取り合い、行動をともにするという、友人間でみられるようなコミュニケーションの多さを表すものと思われる。共行動がいずれの因子にも負荷が高いことから、パス解析では、対面交流、郵便交流、共行動の潜在変数として「対面的コミュニケーション」を、共行動、メール交流、電話交流の潜在変数として「友人的コミュニケーション」を設定することにした。

#### 4. 共分散構造分析によるモデルの検討

共分散構造分析には、SPSS社のAmos5.0を利用したが、このソフトウェアでは、データに欠損値がある場合、モデルの適合度を示す指標としてよく使われる、GFI、AGFIが算出されない。そこで分析に先立って、次のようなルールで欠損値の多いケースを除外、または欠損値の補填を行った。

- ①母と子の絆：各下位尺度2項目までの欠損値は平均値を代入。それ以上の欠損値があるケースは分析から除外した。
- ②コミュニケーション：対面会話が欠損値の場合、分析から除外。郵便交流の2項目は頻度が非常に低いため、これら2項目のみが欠損値の場合、2項目とも「まったくなかった」とする。これら以外の項目中2項目以上が欠損値の場合、分析から除外。同一メディアに関する項目の1項目のみが欠損値の場合は平均値を代入した。
- ③相互支援：日常的サポートは2項目までの欠損値の場合平均値を代入。それ以上は分析から除外。緊急時サポート、心理的サポートは1項目欠損値の場合平均値を代入、それ以上の欠損値

は分析から除外。儀礼的交換は1項目でも欠損値があれば分析から除外した。

④配偶者の有無・子どもの有無・空間的距離のいずれかに欠損値がある場合には分析から除外した。

以上のようなルールに従って、分析データを確定したところ、46名が分析から除外され、821名となった。なお、まったく欠損値がなかったのは773名である。

上記のような操作を経たデータを利用して共分散構造分析を行っ

た。最初に検討した予測モデルは、母娘システムの各要素を検討した結果修正した図2のようなパス図である。図1と異なる点は、コミュニケーションが検討の結果、2つの潜在変数に分かれているところである。共分散構造分析による予測モデルの適合度は表12ようになった。ただしこのモ

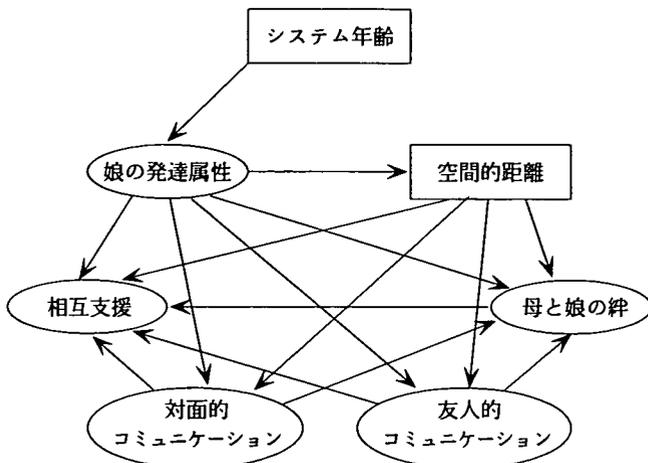


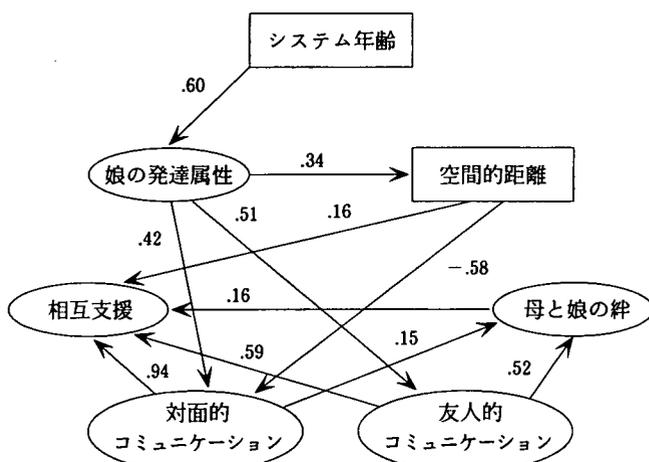
図2 共分散構造分析のためのパス図（予測モデル）

表12 共分散構造分析による各モデルの適合度指標

	$\chi^2$ 値	df	p	GFI	AGFI	CFI	AIC	RMSEA
予測モデル	819.185	121	.000	.899	.858	.888	919.185	.084
修正モデル	826.426	125	.000	.898	.861	.888	918.426	.083
単純化モデル	866.701	128	.000	.895	.860	.882	952.701	.084

デルでは、娘の発達属性から母と娘の絆および相互支援に向かうパス、空間的距離から母と娘の絆および友人的コミュニケーションに向かうパスが有意とならなかった。

そこでこれらのパスを削除した修正モデルについて同様の検討を行った。その結果も表12に示したが、予測モデルに比べ、若干ではあるがAGFI, AIC, RMSEAにおいて適合度に改善が見られた。なお、念のために有意ではあるがパス係数の相対的に低い空間的距離から相互支援、母と娘の絆から



註：数値はすべて標準化係数。いずれも1%水準で有意

図3 修正モデルの共分散構造分析結果

相互支援, 対面的コミュニケーションから母と娘の絆に至るパスを削除した単純化モデルも同様に検討した結果を表12にあわせて示した。このモデルは修正モデルに比べて適合度の改善が見られなかったため、最終的に修正モデルを採用することとした。修正モデルのパス図にパス係数を書き込んだものを図3に示した。ただし、図3では、潜在変数の観測変数および誤差については省略してある。

#### IV. 考 察

本稿では母娘システム全体の検討をする前に、各システム要素の構造を個々に検討した。ここでは、まずそれらの結果について考察を加えたい。

システム機能の一つとして取り上げた「母と娘の絆」では、前報(永田ら, 2005)における下位尺度構成と比べると、各下位尺度の意味はより明確になったものの、「干渉」因子は下位尺度として成立しなかった。これは抽出された第5因子に高い負荷を示す項目が1項目しか見られなかったのを、前報(永田ら, 2005)では一つの下位尺度として取り上げ、本稿では取り上げなかったためである。このことは、水野(2002)のあげた「葛藤」因子に対応する「干渉」が存在しないことを必ずしも意味するものではなく、今回取り上げた「母と娘の絆」の構成項目に、「干渉」に関連する項目が少なかったことを示している可能性がある。今後、これらの項目を補填して尺度の再構成を試みる必要があるだろう。

システム機能の今ひとつの要素として取り上げた「相互支援」では、前報(永田ら, 2005)とまったく同じ下位尺度構成がみられた。これについては母娘システム検討の用具として、一定の有用性が確認されたと言ってよからう。

システム機能に影響を与える要素の一つとしてコミュニケーションを取り上げたが、これについては因子分析の結果、対面的コミュニケーションと友人的コミュニケーションの2因子構成となっていることがわかった。システム年齢の経過にしたがって別居が増加していく中で、「対面」してのコミュニケーションが因子として抽出されたことは、空間的距離のいかにかわかわらず、「対面」の重要性が示されたものであろう。また、システム年齢の経過は、母娘関係における依存から自立へという変化を伴うが、「友人的コミュニケーション」因子の抽出は、そのような母娘関係の変化の方向を示唆するものかもしれない。また構成項目の一つである「共行動」がこれら2つの因子に対してともに高負荷であることは、「母娘が行動をともにする」ことの重要性が示されているようで興味深い。

次に、本稿の主要な目的である、システム機能の母娘システム全体の中での位置づけを検討した共分散構造分析の結果について考察したい。

今回システム機能として取りあげた機能の一つである母と娘の絆は、図3からわかるようにコミュニケーションの2要素からのパスのみが有効であり、当初予想していた娘の発達属性、空間的距離からのパスは有効ではなかった。またコミュニケーションの2要素のパス係数をみると、友人的コミュニケーションのパス係数がかなり高く(.52)、対面的コミュニケーションのパス係数は比較的低かった(.15)。これらの結果から、母と娘の絆の維持・発展にはコミュニケーションが大きな役割を果たしており、そのなかでも、依存から自立へと変化する母娘関係を反映すると思われる「友

人的コミュニケーション」の重要性が示されたといえよう。母娘関係における変化を、うまくコミュニケーションの形態に取り込んでいくことが、母と娘の絆を維持する鍵になることを示しているのだろう。

システム機能の今ひとつの要素である相互支援は、母と娘の絆同様、コミュニケーションの2要素からのパスが有効で、そのパス係数はいずれも高い。その中でも対面的コミュニケーションのパス係数はごく高く（.94）、相互支援が心理的なものも含むとはいえ、日常的サポート、緊急時サポート等には、対面的コミュニケーションの存在が前提であることを示すものであろう。また予測通り、母と娘の絆からのパスも有効であり、相互支援は母と娘の絆を基盤とするものであることを示す結果となったが、そのパス係数はあまり高くなかった（.16）。

以上のように、システム機能として取り上げた母と娘の絆についても相互支援についても、コミュニケーションの2要素の重要性が示されたが、次にこれらのコミュニケーションの2要素へのパスを検討する。これらへのパスとしては当初、娘の発達属性と空間的距離というシステム構造の要素を取り上げたが、この中で空間的距離から友人的コミュニケーションへ向かうパス以外が有効であった。空間的距離から対面的コミュニケーションへ向かうパスのパス係数はマイナスであり（-.58）、空間的距離が遠くなるほど対面的コミュニケーションが減少するのは当然であるが、娘の発達属性に伴ってコミュニケーションが維持されるものの、空間的距離に影響される対面的コミュニケーションと、影響されない友人的コミュニケーションとに明確に特徴が分かれることが注目される。前項で検討したように母娘関係の変化にあわせてコミュニケーションの形態を変容することの重要性がここでも示されたと言えるだろう。

最後に、採用した修正モデルの適合度について検討したい。適合度については明確な基準があるとは言えない（小野寺，1999）ので、共分散構造分析を行った最近のいくつかの文献を検討したところ、GFI、AGFI、CFI等の基準では0.85～0.9、RMSEAでは0.05～0.08程度でモデルを採用していることがわかった。そこで、本稿の修正モデルの検討でも、十分な適合度が得られたと判断した。しかし、もっと厳しい基準で判定を行っている文献もあり、本稿で採用したモデルにおいても、さらに適合度を高めるような努力が必要であろう。今回の分析では、システム年齢によって規定されるシステム構造については娘システムの発達属性のみをとりあげたが、母システム側の要因も導入すべきであろう。また母娘の二者間構造として空間的距離のみを取り上げたが、同居・別居といった質的な要因も取り入れるべきだったかもしれない。

母娘システムは、多数の要因が複雑にからみあっており、その統合的な把握はなかなか困難ではあるが、各要因のよりの確な把握ができるよう努力するとともに、縦断的な検討の必要も含めて、今後の検討課題としたい。

## 文 献

- 小高 恵 1998 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究 教育心理学研究 46(3), 333-342.  
 水野-島谷いずみ 2002 日本における成人期の母娘関係の概念的枠組みと測定尺度 —都市在住の女性を対象とした分析— 社会心理学研究, 18(1), 25-31.

- 永田忠夫・新美明夫・松尾貴司 2005 初期成人期の母娘関係に関する研究 —母娘システムとしての分析— 医療福祉研究 (愛知淑徳大学医療福祉学部), 1, 94-113.
- 小野寺孝義 1999 Amosでの分析方法 山本嘉一郎・小野寺孝義 (編) Amosによる共分散構造分析と解析事例 ナカニシヤ出版 23-47.
- 山本嘉一郎 1999 共分散構造分析とその適用 山本嘉一郎・小野寺孝義 (編) Amosによる共分散構造分析と解析事例 ナカニシヤ出版 1-22.